



第5回  
忘れられない看護エピソード

[一般部門]

優秀賞

## 心の医療を目指して

〈広島県〉 もりもと 森本 まなみ 愛美 17歳

「食べる。食べる。食べたなら元気になるからな。早くに家に帰ろうな」

これは、ある病院で行われたふれあい看護体験に参加した時、私が聞いた言葉です。おじいさんが、入院中のおばあさんを見舞い、その時、出されたゼリーを食べるよう声を掛けていました。頭をなで、肩をもみ、優しいまなざしで励ますおじいさん。おばあさんは体を動かすことも表情を変えることも難しい状態でした。前日はようやく一口食べられたそうです。ですがその日、おばあさんはおじいさんの言葉や思いに応えるようにスプーンを握り、ゆっくりと口に運び続け、全て自分で食べきったのです。

気が付くと、私は涙を抑えるこ

とに必死になっていました。

幼いころの私は体が弱く、体調を崩すとたびたび入院していました。入院中の私のそばには、いつも家族や友達がいてくれました。面会時間が終わり皆が帰った後は、看護師さんがずっと私のそばにいてくれました。点滴のガーゼにキャラクターの絵を描いて楽しませてくれた記憶もあります。

人のそばに人がいる。幼いころの私の入院生活が、老夫婦の姿と重なり合いました。

家族、そして看護師には「器具を使わない医療」の力があると思います。その人を思いサポートする日々の営みは、体のみならず心を癒すのです。私自身がそう

であったように癒しは安らぎとなり、その積み重ねが病と向き合うエネルギーや意思を生み出すと思います。それは、人によってもたすことのできる医療だと考えています。

今春、私は高校3年生になります。幼いころ私が与えてもらったぬくもりを看護師になり、病と闘う子どもたちに届けたい。小児科の看護師になることは、幼いころから変わることのない私の夢です。温かい看護師に、私はなりたい。これまで出会い支えてくれた人たちの思いを胸に、これからも学び続け、そして人と共に生きていきます。